



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

日本人英語学習者と英語母語話者によるEssay Writingにおける冒頭文の比較

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 公開日: 2023-12-11 キーワード (Ja): 英語ライティング, 冒頭文, 対照修辞学, 日本人英語学習者, コーパス, ETYP:教育関連論文, SSUB:英語 キーワード (En): Essay Writing in English, Opening Sentences, Contrastive Rhetoric, Japanese EFL Learners, Corpus 作成者: 伊東, 哲 メールアドレス: 所属: 東京学芸大学
URL	http://hdl.handle.net/2309/0002000157

日本人英語学習者と英語母語話者による Essay Writingにおける冒頭文の比較

伊 東 哲*

1. はじめに

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説外国語編・英語編（文部科学省，2018）では，新科目として「論理・表現」が設置されるなど，日本の英語教育においてライティングの重要性が高まってきている。英語ライティングにおいて，その論理や構成について言及している文献は多い。指導内容に関して言えば，学習指導要領解説においては，「論理・表現I」の内容に関する事項として「目的や場面，状況などに応じた論理の構成や展開」が挙げられており（p.91），その解説として「説明文や論証文においては一般的に，各段落の主題を述べるトピック・センテンスと，その内容を支える指示文（サポーティング・センテンス）が含まれる。」（p.92）と記載されている。また，Kaplan（1966）から始まる対照修辞学の分野の研究においては，日本人英語学習者が用いる英語ライティングにて用いる構成などがある程度示されてきており，その主題の位置に注目が集まることが多い（e.g. Hinds, 1983; Oi, 1986; Hirose, 2003 など）。しかしながら英語ライティングにおいて，どのような内容を用いて主題を伝えていくのかについて記述した研究は少ない。そこで本研究では，英語母語話者と大学生の日本人英語学習者による賛成・反対を表明する英語ライティングを対象とし，主題が記述されることが多いと考えられる冒頭文に注目し，内容的に基づいた分析からその特徴を捉え，書き出しについての指導への示唆を得ることを目的とする。

2. 先行研究

英語の論理的な文章に関して，アメリカの多くの州で採用されている共通基準のCommon Core State Standards（CCSS, Common Core State Standards Initiative, 2010）では，Grade12におけるWriting StandardのArgumentとして，“introducing a precise, knowledgeable claim”（p.45）が挙げられている。また，Martin（1992）は英語テキストにおいて論証文での導入段落に配置される文の役割としてmacro-themeという概念を挙げている。これはいわゆる主題（Thesis Statement）の役割を果たすものである（p.438）。Martinは論証文における好ましい構成として，冒頭に配置されるmacro-themeから各段落に配置される主題文（Topic Sentence）を適切に予想できるようになっているものをあげている（p.442）。このように，英語文化圏における論証文では導入として主題を述べる形が好ましく捉えられていることが分かる。

日本人英語学習者が英語ライティングをどのような構成で文章を書くのかについては，対照修辞学の分野において研究されてきた。Hinds（1983）は，朝日新聞に掲載されている天声人語を対象として，その構成がどのようなになっているかを分析し，起承転結の型を非英語的な構成として取り上げ，この構成が英語ライティングに対して負の転移をもたらす可能性を示唆している。Oi（1986）では，日本人大学生とアメリカ人大学生を対象として，“Do you think T.V. commercials should be banned totally?”に対する論証文を書かせる課題を実施した。日本人大学生は日本語ライティングを行う群と英語ライティングを行う群があり，日本人英

* とう さとし 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所言語文化系教育講座

キーワード：英語ライティング／冒頭文／対照修辞学／日本人英語学習者／コーパス

語学習者の日本語ライティングにおいては具体的な事柄から書き始め、主題を文章の後半に配置する書き手が多くみられた(73.7%)。一方で、日本人英語学習者による英語ライティングにおいては参加者のうち半数程度(53.3%)が最初に主題を書き、残りの半数程度が後半に主題を書いたり(20%)、主題を明記せずに書いたり(20%)していた。またアメリカ人の大学生による英語ライティングの多く(70.6%)では最初に主題が述べられていた。Hirose(2003)では、日本人大学生を対象として、学校の制服について立場を一つ選択したうえで日本語と英語で意見文を書く課題が実施された。日本語ライティングにおいては参加者のうちの多数(73.3%)が文章の前方に主題を書き、残りの参加者は後半や中ほどに主題を記述していた。一方で、英語ライティングにおいては全ての参加者が文章の前方に主題を記述していた。これについてはHiroseはトピック・センテンスを前に置くという知識の過剰一般化の可能性を指摘している。これらの研究を通して、日本人英語学習者による英語ライティングについてはその主題の位置に関する研究が行われてきており、主題が冒頭に置かれるという傾向が明らかになってきている。

このように英語学習者のライティングにおいては主題や主張の位置、また論の構造などについては焦点が当たっているものの、どのような主題のタイプがあるのかといった、その主題を示す文自体については見落とされてきている(Yang, 2022)現状がある。このような問題意識からYangは中国人の英語学習者の英語論文を対象として、Toulminモデル(Toulmin, 2003)のClaimと限定詞に基づいて分類を試みた。ToulminモデルにおけるClaimとは論説における書き手の主張であり、限定詞とはその主張の範囲を定める言葉である。Yangは3種類の形の限定詞(QW: Qualifiers in word form; QP: Qualifiers in participle form; QS: Qualifiers in sentence

form)が冒頭に現れるClaimとどのように組み合わせられているかという観点から分析した。結果として23種類の組み合わせが見つかり、最も多い組み合わせはQW + Claimの組み合わせであり(22.19%)、次いでQS + Claim1 + Claim2が多かった(14.12%)。なおこの研究においてClaimが単独で用いられたのは全体の5.4%であった。このYangの研究では今まで焦点が当たってこなかったClaimの述べ方について焦点を当てている一方で、分類は限定詞の組み合わせのみによって行われており、その限定詞がどのような内容を述べているかについては問われていない。

日本語の文章論においては、文章の始発点としての冒頭文の重要性が時枝(1960)によって説かれている。そして日本語の冒頭文について、その内容に基づいた分類(市川, 1978; 長坂; 1994, 単2017)や、また言語的な特徴に基づいた分類(Nurhadi, 2014; 単, 2017)が行われてきている。ここでは内容に基づいた分類を行った先行研究に言及する。

市川(1978)は文の種類について「事実を述べる文」「見解を述べる文」「事実と見解を交えた文」の類型があるとしたうえで、文章一般の冒頭部(冒頭文を含むまとまり)に関して大きく「叙述内容の集約としての冒頭」「本題に対する前置き・導入としての冒頭」「本題を構成する一部としての冒頭」の3類9種を提案している(表1)。

また長坂(1994)は様々なジャンルにおける論理的な文章の冒頭文についてその内容的な側面から探索的に分析し、「事象の提示」「問題の略説」「筆者の見解の提示」「論述の展開方向の提示」「引用文の提示」「その他」の6種に分類(表2)したうえで、冒頭文に見出される機能を「話題に関する背景知識を提示する」「読むものの便宜を考慮して、論述の立場、展開方向を示す」「論述の課題が、取り上げるに足る有意味な事柄だとい

表1. 市川(1978)による冒頭部の分類

分類	種類
叙述内容の集約としての冒頭	題・要旨・結論・提案などを述べる。／主要な題材・話題について述べる。／あら筋・筋書きを述べる。
本題に対する前置き・導入としての冒頭	筆者の立場・意向・執筆態度などを述べる。／本題の内容を規定し、本題に枠をはめる／導入として、時・所・登場人物を紹介する。／本題に入る前に「まくら」を置く。／本題に対して対比的な内容を述べる。
本題を構成する一部としての冒頭	

表2. 長坂 (1994) による冒頭文の分類

分類	類型
事象の提示	事実の提示／状況・現象の提示
問題の略説	話題の背景の説明／話題の内容の説明
筆者の見解の提示	賛否の提示／評価・感想の提示／主張・要求の提示／疑問の提示／推定による判断の提示)
論述の展開方向の提示	論点の予告／論述の立場の表明／論述の方針の提示／用語・表記上の約束の提示
引用文の提示	
その他	呼びかけ, 問いかけ, 名詞提示, 挨拶等

うことを示す」「読者を引きつけつつ論述の内容に関わる情報性の高い事柄を提示する」という4つにまとめた。

また、単 (2017) は日本の新聞社説を対象としてその冒頭文の機能について「事実提示」「意見提示」「その他」の3種に分類し (表3), 新聞社によって多少の異なりはあるものの, 50%程度の冒頭文が「事実提示」であり, 35%程度の冒頭文が「意見提示」であり, 残りがその他であるという結果を示した。

このように日本語においては内容に焦点を当てた冒頭文の詳細な分類が行われてきているが, 英語においては冒頭文に注目した研究はYang (2022) に限られており, またその内容については十分な検討がなされていない。日本語の文章を対象として行われてきた内容に基づく探索的な分類は, 英語ライティングにおいては十分に馴染まない可能性も考えられるが, 内容に基づいて分類を試みることには価値があると考えられる。

そこで本研究では, 賛成・反対を表明する英語ライティングにおける冒頭文, すなわち文章の一文目を対象として, 英語母語話者と大学生の日本人英語学習者がどのように書き出すのかについて, 内容の観点から分析し類型化することで冒頭文の特徴を捉えること, また彼らによる英語ライティングを比較することを通して, 大学生へのライティング指導への示唆を得ることを目的とした。これにあたり以下の研究課題を設定した。

RQ1 英語母語話者及び大学生の日本人英語学習者による英語ライティングの冒頭文には, どのような類型がみられるか

RQ2 類型化された冒頭文のうち, 使用される頻度の高い類型に属する文はどのような付加要素やバリエーションをもつか

表3. 単 (2017) による冒頭文の分類

事実提示	話題, 出来事, 報告など
意見提示	意見, 見解, 希望, 要求など
その他	引用文, 問い掛けなど

なおRQ1は冒頭文を内容に基づいて類型化し, RQ2は類型化された冒頭文のなかで使用頻度の高い類型として認められるもののみを取り出して, 主たる内容に付加されているものがあるかどうかや, 言語的な特徴からバリエーションを検討するものである。

3. 方法

調査対象

本研究における調査対象はInternational Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE) Written Essayに収録されている文章とした。ICNALEは日本を含むアジアの大学生による学習者コーパスであり, Speaking Monologues, Speaking Dialogues, Written Essay, Edited Essaysの4つのモジュールから成る。本コーパスには学習者に加え英語母語話者のデータも含まれている。多くの統制データが使用できるという利点から, 本研究では本コーパスを使用することとした。

ICNALE Written Essayでは, “Do you agree or disagree with the following statements? Use reasons and specific details to support your opinion.” 発問の後に, Topic Aとして “It is important for college students to have a part-time job.”, Topic Bとして “Smoking should be completely banned at all the restaurants in the country.” というトピックが提示されており, 書き手はこれらのそれぞれの題について, 自身の意見を明確にして根拠や例を示し, 20-40分の時間で, 辞書等を参照せずに, 200-300語の文章を書いた (Ishikawa, 2013, p.97)。なお, 指示の性質上,

書き手の主題が冒頭文に現れることが予想された。またこれらのトピックのうちTopic Bについては、禁煙に関する制度がアメリカと日本において全く異なるため、アメリカ人英語母語話者と日本人英語学習者にとって共通性が著しく低いと考えられる。そのため本研究においてはTopic Aのみを分析対象とし、アメリカ人英語母語話者(ENS-USA)による113編のライティング及び日本人英語学習者(JPN)による400編のライティングを対象とした。ただし、日本人によるライティングのうちの1編はスピーチ原稿の体裁で書かれており、ジャンルとして異なるため分析から除外した。

またICNALEの学習者はCEFR(A2~B2)を参考にレベル分けがされている。このICNALEにおけるレベル分けでは、アジア人英語学習者に適するように、語彙サイズテストの結果に基づいてCEFR A1を削除し、B2, C1, C2の学習者をB2+として扱い、B1はB1.1及びB1.2に分割している(Ishikawa, 2013, p.98)。その結果、分析対象となった399名の日本人英語学習者はA2(154名)、B1.1(179名)、B1.2(48名)、B2+(18名)に分類されている。一方でアメリカ人英語母語話者の背景は様々であり、学生から社会人まで幅広い書き手が含まれていることには留意が必要である。

手続き

冒頭文の類型化は次の手順で実施された。まず、コーパスのテキストデータより冒頭文の抽出を行い、それぞれの内容に基づいてラベル付けを行った。全ての文章における冒頭文についてラベル付けを行ったのち、ラベルを類似するものでまとめ、類型化し「サブカテゴリ」としてまとめた。またその「サブカテゴリ」をさらに類似するもので類型化することで、【カテゴリ】を作成した。この類型化の過程において【カテゴリ】及び「サブカテゴリ」名の整理も行った。【カテゴリ】及び「サブカテゴリ」名の整理においては長坂(1994)や単(2017)を参考とした。なお、重文から成る冒頭文も観察されたが、その場合には最も重要と思われる内容に基づいて分類を行った。最も重要と思われる内容の判定においては、英語教育を専門とする研究者1名にセカンド・オピニオンを求め、その信頼性を確保した。また、主題の位置についても判定を行っ

た。これは冒頭文が一見して主題に見えずとも、文章全体における機能として主題文の役割を担う場合が考えられたためである。ここでは、テキストデータより全文を読んだうえで、論題に対する書き手の主張が含まれている箇所を主題として判定した。

分類に際しては筆者が全ての文章を対象に行い、加えて英語教育を専攻する教職大学院の院生1名がアメリカ人英語母語話者による英語ライティングと日本人英語学習者による英語ライティングのうち、それぞれ約30%の分析を行った。冒頭文の分類において、全ての工程は独立して実施された。分類の結果、【カテゴリ】及び「サブカテゴリ」名にずれがみられたため、2名で【カテゴリ】及び「サブカテゴリ」名の調整を行った。調整後の一致率は92.9%で、ずれが見られる箇所については2名で合議して最終的な判断を行った。また主題の位置についての判定の一致率は92.9%であり、こちらもずれが見られる箇所については2名で合議して最終的な判断を下した。その後、合議の内容を踏まえて筆者が対象を全て再度チェックすることで分析における信頼性の確保に努めた。

また上述のようにして得られた「サブカテゴリ」において特に出現頻度が高かったもの(【カテゴリ：見解】における「サブカテゴリ：賛否」及び「サブカテゴリ：意見」、詳細は後述)については、内容に基づく付加要素の検討と、言語的な特徴に基づくバリエーションの検討をおこなった。

付加要素については、対象となった「サブカテゴリ」に分類された冒頭文に対して、内容的に付加されているものがある場合、それぞれの内容に基づいてラベル付けを行った上で分類した。なお、対象となった2つの「サブカテゴリ」は同一の【カテゴリ】から得られ、内容としては近いものであったため、2つの「サブカテゴリ」に分類された冒頭文をまとめて分類した。付加要素の検討に際しては、筆者1名と英語教育を専門とする別の研究者1名が、付加要素を伴ったすべての冒頭文について分類し、一致率は100%であった。

言語的な特徴に基づくバリエーションについては、分類は各「サブカテゴリ」内で、目立った言語的特徴に基づいてグループ分けを行った。対象となった2つの「サブカテゴリ」それぞれで特徴が見られたため、

「サブカテゴリ」ごとに分類を行った。なお、このバリエーションの検討は筆者1名による分析である。

4. 結果と考察

冒頭文の分類

冒頭文の分析の結果、次のような分類が得られた(表4)。冒頭文は大きく【見解】【事象】【前提】の3つのカテゴリに分類された。

【見解】は賛否の表明や論題に対する考えを示す文である。この類型には「賛否」「意見」「評価」の3種類の文がみられた。続いて【事象】は一般的に言われていることや、身の回りの出来事について説明する文であり、この類型には「一般」「自己」「身の回り」の3種類がみられた。最後に、【前提】は論題自体やその背景について説明する文であり、「論題」「背景」の2種類の文がみられた。以下では各類型についての分類基準と具体例について述べる。

まず【見解】のカテゴリについて述べる。この【見

解】のカテゴリに分類された冒頭文は、与えられた論題に対して、書き手自身の持つ意見を述べており、主題文の役割を果たすものである。【見解】は「賛否」「意見」「評価」の3つのサブカテゴリから構成されている。1つ目の「賛否」は論題に対して、書き手が賛成・反対を明示している文である。多くの場合“I agree ~”もしくは“I disagree ~”から始まる文であった。2つ目の「意見」は論題に対して書き手の考えを示しているものであり、多くの場合“I think ~”や“It is important ~”といった書き出しであった。3つ目の「評価」は論題に関わることがらについて書き手が評価を下しているものであり、「大学生がアルバイトをすべきかどうか」についてではなく、アルバイト自体の良し悪しや、大学生がアルバイトを行うことの利点・欠点などについて述べている冒頭文であった。なお、この「評価」のサブカテゴリについては一見すると書き手の主題として受け取ることが難しい場合もあったが、文章全体を通して見たときには主題の機能を果たしてい

表4. 冒頭文の類型

【見解】	「賛否」	論題に対して、賛成・反対を明示しているもの 例) I agree with this statement that students in college should have a part-time job. (ENS-062)
	「意見」	論題に対して、書き手の考えを明示しているもの 例) I think it is important for college students to have a part-time job. (JPN-238) 例) I don't think that college students need to have a part-time job because our main responsibility is to study and get good grades. (ENS-044)
	「評価」	論題に関わることがらについて書き手が評価を下しているもの 例) Having a part-time job is one of the best things college students do to help prepare themselves for their futures. (ENS-012) 例) But because there are many hidden benefits to having a part-time job, I think that many students stand to benefit by having one. (ENS-049) 例) Part-time jobs are great. (ENS-042)
【事象】	「一般」	他者の考えや一般的に事実とされていること(書き手の主観に依るものも含む)について説明しているもの 例) Many parents want their students to be more responsible. (ENS-055)
	「自己」	書き手自身の状態や経験について説明しているもの 例) I have had a part-time job only in the last semester of college. (ENS-018)
	「身の回り」	書き手に近い人の状態について言及しているもの 例) I have a part-time job, and all of my friends have part-time jobs too. (ENS-033)
【前提】	「論題」	読み手に対して論題自体を提示しているもの 例) Should students do part-time job, because it has innumerable merits? (ENS-114) 例) Whether not college student should have a part-time job has been a matter of serious discussion for as long as I can remember. (ENS-039)
	「背景」	論題について考える上での背景や前提になることがらを提示しているもの 例) As college students, should we expect our parents to pay for all of our tuition and board expenses, or should we begin to learn about the real world and the important topic of financial responsibility? (ENS-022)

注. 例として記載した文の末尾の英数字はICNALE上で書き手に割り当てられたコードである。ENSとJPNはそれぞれEnglish Native SpeakerとJapaneseを表す。

また、下線を引いた「賛否」と「意見」は付加要素及び言語的な特徴に基づくバリエーションの分析の対象である。

るものであった。

この【見解】のカテゴリはCCSS (CCSS Initiative, 2010) で示されていることに合致する冒頭文であった。分析対象としたコーパスであるICNALEの指示文は論題に対して同意するか否かを問うものであったため、比較的導き出されやすい冒頭文のカテゴリと言える。

続いて【事象】のカテゴリについて述べる。このカテゴリは「一般」「自己」「身の回り」の3つのサブカテゴリから構成されている。1つ目の「一般」は書き手以外の他者の考えや、一般的に事実とされていることから（書き手が主観的に事実と考えているものも含む）について説明する文である。2つ目の「自己」は書き手自身の置かれている状態や経験について説明する文である。3つ目の「身の回り」は書き手及び書き手に近い人の、2者以上の状態について言及している文である。

この【事象】のカテゴリに共通する点は論題に対する書き手の見解を述べるのではなく、自身や他者のことがらを記述しており、論題に対して書き手の見解を述べていくにあたっての導入の役割を果たしていると考えられる。

最後に【前提】のカテゴリについて述べる。このカテゴリは「論題」「背景」の2つのカテゴリから成る。1つ目の「論題」は読み手に対して論題自体を提示している文である。このカテゴリには読み手に対して論題を投げかけるような冒頭文も含まれている。2つ目の「背景」は論題について論じていく上での背景や前提になることがらを提示・説明する文である。

この【前提】のカテゴリに共通する点は与えられた題について読み手に考えさせる文を記述していることである。このカテゴリは読み手に論題やその背景を提示することで、読み手と議論を共有し、読み手に議論へ参加する機会を与える意図があると考えられる。

アメリカ人英語母語話者と日本人英語学習者との比較

表5はアメリカ人英語母語話者及び日本人英語学習者による英語ライティングにおける各冒頭文の分類結果である。アメリカ人英語母語話者によるライティング（全113編）は【見解】が89編（78.8%）、【事象】が17編（15%）、【提示】が7編（6.2%）であった。

【見解】が多数であるものの、その他の冒頭文も21.2%みられる結果となった。また多くみられた【見解】89編の内訳については「賛否」が30編（全体の26.5%）、「意見」が39編（34.5%）、「評価」が21編（18.6%）であった。

一方で、日本人英語学習者による英語ライティング（全399編）では、【見解】が392編（97.7%）、【事象】が5編（1.3%）、【前提】が4編（1%）であり、その大多数が【見解】の冒頭文から書き始める結果となった。またその内訳は「賛否」が256編（全体の63.9%）、「意見」が131編（33.1%）、「評価」が3編（0.8%）であり、大きな偏りがみられた。なおこれはCEFRを参考とした学習者のレベルに関わらず同一の傾向であり、学習者の英語習熟度によらず、同じような冒頭文を使用していると言える。

両者を比較すると、アメリカ人英語母語話者によるライティングにおいては【見解】以外の【事象】【前提】のカテゴリから始まる文章がより多くみられ、また最も多く使用された【見解】の中でも「賛否」「評価」「意見」のサブカテゴリが同程度の割合で使用されていたが、日本人英語学習者はその大多数が【見解】の「賛否」及び「意見」を使用しているという違いがみられた。

アメリカ人による英語ライティングについてはCCSS (CCSS Initiative, 2011) によって明示された目標と比較したとき、概ね一致すると言える。なお、【事象】や【前提】に分類された文から書き始められた文章（23編）のうち、冒頭文の直後に書き手の【見解】が明記される文章は5編であり、【見解】が明記されない文章（4編）や、文章の中盤（3編）や最後（11編）になってから現れる文章も一定数あった。ただし本研究で分析対象となったデータの書き手の背景が多様であったことには留意が必要である。また日本人による英語ライティングについても同様のことが言える。しかしながら、アメリカ人英語母語話者によるライティングと比較したとき、Hirose (2003) で指摘されるような過剰一般化とも言えるような画一性がみられ、言語使用としては豊かな状態であるとは言い難い。

表5. アメリカ人英語母語話者によるライティングと日本人英語学習者によるライティングの冒頭文の分類

	【見解】				【事象】				【前提】			総計
	「賛否」	「意見」	「評価」	計	「一般」	「自己」	「身の回り」	計	「論題」	「背景」	計	
ENS_USA	30	39	20	89	10	5	2	17	4	3	7	113
	26.5	34.5	17.8	78.8	8.8	4.4	1.8	15	3.5	2.7	6.2	100
JPN	255	132	3	390	4	1	0	5	2	2	4	399
	63.9	33.1	0.8	97.7	1	0.3	0	1.3	0.5	0.5	1	100
A2.0	97	55	1	153	0	0	0	0	0	1	0	154
	63	35.7	0.6	99.4	0	0	0	0	0	0.6	0	100
B1.1	115	57	2	174	2	1	0	3	2	0	2	179
	64.2	31.8	1.1	97.2	1.1	0.6	0	1.7	1.1	0	1.1	100
B1.2	31	15	0	47	1	0	0	1	0	1	0	48
	64.6	31.3	0	97.9	2.1	0	0	2.1	0	2.1	0	100
B2+	12	5	0	17	1	0	0	1	0	0	0	18
	66.7	27.8	0	94.4	5.6	0	0	5.6	0	0	0	100
総計	285	171	23	479	14	6	2	22	6	5	11	512
	55.7	33.4	4.5	93.6	2.7	1.2	0.4	4.3	1.2	1	2.1	100

注. 下段は割合 (%)

「賛否」「意見」への内容的な付加要素と言語的な特徴のバリエーション

ここでは分析対象となった冒頭文において、特に多く観察された「賛否」及び「意見」のサブカテゴリの文に対して、どのような要素が付加されていたか、またその「賛否」及び「意見」の述べ方にどのような言語的な特徴に基づくバリエーションがみられるかについて述べる。

まず、「賛否」及び「意見」の冒頭文に内容的に付加されていた要素について述べる。付加要素は大きく8つ（「論題」、「繰り返し」、「立場」、「条件」、「譲歩」、「理由（具体）」、「理由（抽象）」、「理由（予告）」）みられた（表6）。「理由」を示す付加要素については、理由の程度に基づいて、具体的な理由まで述べているものである「理由（具体）」、「There are many benefits~」などにとどめた抽象度が高いものである「理由（抽象）」、「for the following reasons」など次に続く形にとどめたものである「理由（予告）」の3つに分類された。

なお、これら観測された付加要素の個数を集計すると表7になる。アメリカ人英語母語話者によるライティングでは「賛否」もしくは「意見」を示す69編の文章のうち、約半数は付加要素を持っていた。アメリカ人英語母語話者によるライティングにおいて比較的好くみられた付加要素としては「理由（具体）」、「譲

歩」、「条件」、「理由（予告）」が挙げられる。一方、日本人英語学習者による英語ライティングにおいて付加要素が見られたのは「賛否」「意見」カテゴリに該当する387編の文章のうち、およそ10%にあたる36編のみであった。その中で比較的好くみられたものは「理由（具体）」、「理由（予告）」が挙げられる。

ここでは日本人英語学習者は「賛否」もしくは「意見」を示す文を単独で使用する傾向が強くみられた。また習熟度別にみると、ICNALEでB2+の習熟度に分類されている日本人英語学習者の方が付加要素をより使用する傾向もみてとれるが、誤差の範囲といえるだろう。付加要素の有無についても、英語の全般的な習熟度によらない画一性が確認された。一方で、日本人英語学習者が使用していた付加要素は、アメリカ人英語母語話者によるライティングにおいても使用されている付加要素であった。特に、「理由（具体）」や「理由（予告）」については両方の書き手から比較的好くみられている共通点も見出せる。

続いて「賛否」及び「意見」の言語的な特徴に基づくバリエーションについて述べる。日本人英語学習者による英語ライティングにおいて最も多くみられた「賛否」のサブカテゴリについては、大きく(a) “I agree.”のように賛否のみを表す文、(b) “I agree with the statement.”のように問題文の論題を照応しつつ賛否

表6. 「賛否」及び「意見」においてみられた付加要素

付加要素	例
論題	読み手に対して論題自体を提示するもの 例) <u>I believe that is a fairly broad and generic statement and I would have to disagree.</u> (ENS-134)
繰り返し	自身の「賛否」または「意見」を繰り返すもの 例) <u>I agree with this statement, and I think that college students should have a part-time job.</u> (JPN-014)
立場	論じる上での立場を示すもの 例) <u>As one of college students, I agree to the statement.</u> (JPN-008)
条件	自身の「賛否」または「意見」に条件を付けるもの 例) <u>I think it is important for college students to have a part-time job if it doesn't obstruct study.</u> (JPN-211)
譲歩	譲歩を示すもの 例) <u>Although some people think that having a part-time job in college is very important, I personally think that a student should focus more of their time on studying.</u> (ESN-017)
理由 (具体)	「賛否」または「意見」の理由を具体的に示すもの 例) <u>I agree that it is important for college students to have a part-time job, because some of them may need it to earn money for the cost of living and school expenses.</u> (JPN-092)
理由 (抽象)	「賛否」または「意見」の理由を抽象的に示すもの 例) <u>There are many benefits of having a part-time job for college students, so I think it is important for college students to have a part-time job.</u> (ENS-060)
理由 (予告)	「賛否」または「意見」の理由を予告するもの 例) <u>I agree the statement that it is important for college students to have a part-time job for the following reasons.</u> (JPN-298)

注. 下線は筆者による。付加要素について下線を引いた。

表7. 「意見」及び「賛否」における付加要素

	論題	繰り返 返し	経験	条件	譲歩	身の 回り	理由 (具)	理由 (抽)	理由 (予)	付加 なし	総計
ENS_USA	1	2	1	4	7	1	12	2	4	35	69
	1.4	2.9	1.4	5.8	10.1	1.4	17.4	2.9	5.8	50.7	100
JPN	0	1	2	2	2	0	21	1	6	351	387
	0	0.3	0.5	0.5	0.5	0	5.4	0.3	1.6	90.7	100
A2.0	0	0	0	1	1	0	11	1	1	137	152
	0	0	0	0.7	0.7	0	7.2	0.7	0.7	90.1	100
B1.1	0	1	1	1	0	0	8	0	3	158	172
	0	0.6	0.6	0.6	0	0	4.7	0	1.7	91.9	100
B1.2	0	0	1	0	0	0	0	0	2	43	46
	0	0	2.2	0	0	0	0	0	4.3	93.5	100
B2+	0	0	0	0	1	0	2	0	0	14	17
	0	0	0	0	5.9	0	11.8	0	0	82.4	100
総計	1	3	3	6	9	1	33	3	10	387	456
	0.2	0.7	0.7	1.3	2	0.2	7.2	0.7	2.2	84.9	100

注. 下段は割合 (%)

を表す文, (c) “I agree with the statement that ~.” のように問題文にある論題の内容を改めて述べつつ賛否を示す文という3つのバリエーションがみられた (表8)。アメリカ人英語母語話者によるライティングでは (a), (b), (c) がそれぞれ12編 (40%), 2編 (6.7%), 16編 (53.3%) であり, 日本人英語学習者による英語ライティングでは (a), (b), (c) がそれぞれ3編 (1.2%), 143編 (56.1%), 109編 (42.7%) であった。日本人英語学習者は (b) のタイプの使用頻度が最も高かったが,

アメリカ人英語母語話者によるライティングにおいては (b) は「賛否」の中では最も使用されなかった。また (a) のタイプについては, アメリカ人英語母語話者は比較的使用するものの, 日本人英語学習者はほとんど使用していなかった。ただしこれは先述した付加要素の存在を考慮していないことには注意が必要である。“I agree.” 及び “I disagree.” のみで冒頭文を終えていたのは12編中5編であり, 付加要素があるケースが7編みられた。これらのことから, アメリカ人英語母

表8. 「賛否」のバリエーション

	(a)	(b)	(c)	総計
ENS_USA	12	2	16	30
	40	6.7	53.3	100
JPN	3	143	109	255
	1.2	56.1	42.7	100
A2.0	2	50	45	97
	2.1	51.5	46.4	100
B1.1	1	68	46	115
	0.9	59.1	40	100
B1.2	0	15	16	31
	0	48.4	51.6	100
B2+	0	10	2	12
	0	83.3	16.7	100
総計	15	145	125	285
	5.3	50.9	43.9	100

注. (a) I agree. (b) I agree with the statement. (c) I agree with the statement that~.
下段は割合 (%)

語話者は賛否を示すにあたり、冒頭文において論題を照応するであれば、再度論題の内容を提示する (c) のタイプで照応を行い、論題を照応しない場合には、(a) のタイプの短い記述に止め、別の内容を記述する傾向にあることが分かった。

最後にアメリカ人英語母語話者のライティングの冒頭文として最も多くみられた「意見」のサブカテゴリにおける言語的な特徴に基づくバリエーションについて述べる。ここでは大きく (a) It is important to have ~. (b) I think it is important ~. の “think” を使用するか否かによって分けられる 2 つのバリエーションがみられた (表 9)。アメリカ人英語母語話者によるライティングでは (a) (b) それぞれ 14 編 (35.9%), 25 編 (64.1%) であり、偏りはあるものの両者とも使用されていた。一方で日本人英語学習者による英語ライティングではそれぞれ 6 編 (4.5%), 126 編 (95.5%) であり、大多数で “think” が用いられていた。これらのことから日本人英語学習者のライティングにおける「意見」はアメリカ人英語母語話者による「意見」の述べ方と比較して画一的であると言えるだろう。

5. おわりに

本研究では大規模コーパスに収録されたアメリカ人英語母語話者及び大学生の日本人英語学習者による賛成・反対を表明する英語ライティングを対象として、その冒頭文に焦点をあててその分類を試みた。その結

表9. 「意見」のバリエーション

	(a)	(b)	総計
ENS_USA	14	25	39
	35.9	64.1	100
JPN	6	126	132
	4.5	95.5	100
A2.0	1	54	55
	1.8	98.2	100
B1.1	5	52	56
	8.9	92.9	100
B1.2	0	15	15
	0	100	100
B2+	0	5	5
	0	100	100
総計	20	151	171
	11.7	88.3	100

注. (a) It is important to have ~. (b) I think it is important to have~.
下段は割合 (%)

果、冒頭文の種類として【見解 (「賛否」・「意見」・「評価」)】【事象 (「一般」・「身の回り」・「自己」)】【前提 (「論題」・「背景」)】の種類が得られた。また両者による英語ライティングの冒頭文を比較したとき、日本人英語学習者は約 97.7% が「見解」を使用しており極めて画一的な冒頭を書き出す一方で、アメリカ人英語母語話者による英語ライティングでは多数は【見解】を使用するものの、【事象】や【前提】といった他の冒頭文の種類も一定数みられることが分かった。また、日本人英語学習者による使用頻度の高かった「賛否」及び「意見」を詳細にみても、日本人英語学習者はその冒頭文において「賛否」もしくは「意見」のみを

述べることが多いが、半数程度のアメリカ人英語母語話者はそれらを単体で述べることに止まらず、様々な要素を加えて述べていることが分かった。

本研究の結果を受けて、日本人大学生に対するライティング指導の教育的示唆として、英語ライティング指導、特に賛成・反対の立場を書くライティングにおいては、主題の書く位置に止まらない指導をすることの必要性が挙げられる。学習指導要領(文部科学省, 2018)やCCSS (CCSS Initiative, 2011)による記載に対して、日本人英語学習者は概ねそれに沿った書き出しをしている状態にある。またそれはアメリカ人英語母語話者が用いることのある構成とは一致しており、許容される書き方ではあるだろう。しかしながら、アメリカ人英語母語話者と比較したときにはその内容の豊かさには大きな差があり、主題の位置についても冒頭文以外に配置しているケースも多くみられる。文章をより豊かにしていくために、冒頭文において書き手の「賛否」や「意見」に加えて、具体的な理由、譲歩や条件などの様々な付加要素を加えられることや、身の回りの【事象】や議論の【前提】から提示するといった書き方の可能性についても考えていくべきであろう。

最後に本研究の限界点を述べる。第一に、分析対象となったアメリカ人英語母語話者の背景が多様であったことが挙げられる。本研究ではそもそもの文章の質について考慮していないため、モデルとして扱うには難しいものが含まれていた可能性がある。そのため今後は文章の質も考慮した分析も必要であろう。第二に、本研究で用いられた英語ライティングは賛成・反対の立場から記述された英語ライティングであり、そのトピックも1つに限られる。今後は異なるジャンルやトピックに基づく英語ライティングについての分析も待たれる。第三に、冒頭文から導き出される全体の流れ等についての検討の必要性が挙げられる。本研究では冒頭文に限って分析を試みたが、これらの冒頭文がどのような全体の構成を促しているのかについても今後の課題としたい。最後に使用コーパスの課題設定が挙げられる。分析に使用したコーパスで用いられたライティング課題は、学習者にとって実際のコミュニケーションを意図した課題とは言い難いものであった。そのため課題によっては異なる結果が得られる可能性が

あるため、よりコミュニケーション的な設定がされたライティング課題に基づくデータの分析も必要であろう。

本稿は、第51回中部地区英語教育学会福井大会にて口頭発表した内容をもとに執筆したものである。

引用文献

- Common Core State Standards Initiative. (2010). *Common core state standards for English language arts & literacy in history/social studies, science, and technical subjects*. Retrieved from http://www.corestandards.org/assets/CCSSI_ELA%20Standards.pdf
- Hinds, J. (1983). *Contrastive rhetoric: Japanese and English*. *Text* (3), 183-195.
- Hirose, K. (2003). Comparing L1 and L2 organizational patterns in the argumentative writing of Japanese EFL students. *Journal of Second Language Writing*, 12 (2), 181-209.
- Ishikawa, S. (2013). The ICNALE and sophisticated contrastive interlanguage analysis of Asian learners of English. In S. Ishikawa(Ed.), *Learner corpus studies in Asia and the world*, 1. 91-118.Kobe University.
- Martin, J. R. (1992). *English text: System and structure*. John Benjamins.
- Nurhadi, D. (2014) 『日本語論説文の文章構造』名古屋大学大学院文学研究科人文学専攻博士論文。
- Oi, K. (1986). Cross-cultural Differences in Rhetorical Patterns: A Study of Japanese and English, *JACET Journal*, 17, 34-48.
- Toulmin, S. E. (1958/2003). *The uses of argument*. Cambridge University Press.
- Yang, R. (2022). An empirical study of claims and qualifiers in ESL students' argumentative writing based on Toulmin model. *Asian-Pacific Journal of Second and Foreign Language Education*, 7, Article 6.
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』明治書院。
- 単艾婷 (2017) 『論説文におけるテキスト構造の日中対照研究：新聞社説を分析資料として』九州大学大学院博士論文。
- 時枝誠記 (1960) 『文章研究序説』山田書院。

日本人英語学習者と英語母語話者による Essay Writing における冒頭文の比較

文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説外国語編・英語編』 Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf

長坂水晶 (1994) 論理的文章における冒頭文の分類と機能. 『言語文化と日本語教育』 7, 14-25.